

バプテスマ準備・入会 クラス

宗教法人 南本州宣教団

浜寺聖書教会

〒592-8345

堺市西区浜寺昭和町4丁462

TEL. 072-262-7287

FAX. 072-262-0206

目 次

I. 救いについて	1
II. バプテスマとは	6
III. 教会とは	8
IV. 浜寺聖書教会の教会組織	10
V. 浜寺聖書教会の信仰告白	13
VI. 浜寺聖書教会の責任	15

I. 救いについて

人には罪の赦しが必要です。すべての人は例外なく神の敵として生まれ、生活し、そして、永遠の地獄へと向かっているからです（エペソ 2:1-3）。敵であるゆえに、創造主なる真の神を愛し、そのお方に従って生きることを拒みます。そして、人は自分を愛し、自分の欲に従って生きることで神の怒りを自分自身の上に積み上げているのです（ローマ 2:5）。では、罪の赦しを受けるにはどうすれば良いのでしょうか？ この章では、この罪の赦し、救いについて学びます。

「本当の神とはどのようなお方か」を知る

神とは創造主である

過去にどれほどの功績があろうと、いかに秀でた偉人であろうと、人は死んだからといって神になるということは絶対にありません。また、私たちの周りに存在する超自然的なあらゆる生き物も、造られたものであって神ではありません。まして、人が自分の必要に応じて造り出したものが神であるはずがありません。真の神とは、私たち人間、自然界、また、宇宙のすべてのものをお造りになった創造主だけです（創世記 1:1、ヨハネ 1:3、イザヤ 44:9-17；45:18、使徒 17:24, 29、ローマ 1:20-23）。

神とは完全に聖い方である

神は私たちのように人を欺いたり、偽りを言ったりするようなお方ではありません。罪と全く無縁な神は、そのようなことを行なわないだけでなく、心に抱くこともないのです。このお方は、罪を犯したことの無い天使たちにさえ、恐れられている完全に聖いお方です。このような完全な聖さをもつ神は、ご自身のご性質に反するいかなる罪をもさばかずに見過ごすことなどできません（レビ 11:44-45；19:2、ヨシュア 24:19、I サムエル 2:2；6:20、I ペテロ 1:16、出エジプト 20:5、イザヤ 6:1-5）。

神とは義なるお方である

「義」、このことばは法的な要素をもつことばで、標準に合致するとか、法にかなうとか、真っ直ぐであることを意味する。神は律法を与えたお方として、さばくお方として、約束を守るお方として、そして、罪を赦すお方として、ご自身の正義を現わす。神の本質は、すべてにおいて正しいことだけを行なう「義なる方」である（イザヤ 56:1、エズラ 9:15、詩 119:137、

エレミヤ 9:24、Ⅰヨハネ 1:9、エペソ 4:24、ヨハネ 17:25、Ⅱテモテ 4:8)。

「神の前に私たちはどのようなものか」を知る

神に逆らう罪人

私たちや万物をお造りになった神は、何の目的でこれらを創造されたのでしょうか？それは、この偉大なる神の栄光、つまり、そのすばらしさを明らかにするためです（イザヤ 43:7）。その目的を果たすためには、この神を愛し、その命令のすべてに逆らうことなく喜んで服従することが必要です（マタイ 22:34-40、マルコ 12:28-34、ヨハネ 14:15）。しかし、現実はどうでしょうか？私たちは神を愛するよりも自分を愛しています。神を信じないだけでなく、神が私たちに望んでおられる聖い、正しい生き方を無視して、自分勝手に快樂のままに生きることを選択して歩んでいます。神を愛さず、信じないという生き方こそが、神の命令に逆らう、神に対する罪なのです（ローマ 1:29-31；3:10-12, 23）

神によってさばかれる運命にある罪人

神に対して罪を犯している人を神が見逃されることはありません。神は必ず罪人をさばかれます。そのさばきは公正で、だれ一人としてさばきの際に言い逃れをすることはできません。神は私たちが実際に行なったことだけでなく、心の中で抱いた不純な思いに至るまで、すべての罪を確実にさばかれます。そして、そのさばきの結果、その人は地獄ではっきりと意識をもったまま永遠に苦しみを受け続けるのです（ヘブル 4:13、ルカ 16:19-31、マタイ 25:46、使徒 17:31）。

自分で自分を救えない罪人

人は、いかなる努力や善行によっても、神のさばきから逃れることはできません。なぜなら、私たちが行なうどのような努力も善行も、決して完全な神を満足させることがないからです。私たちは、決して罪を犯さない、完全に聖い者になることができません。どんなに強い決心をしても、その意志を貫くために自らを鍛えても、心の中に潜む罪を拭い去ることも、その力を抑えることもできないのです。この事実は、罪のさばきとその力から逃れる術（方法）が私たちの内にはないことを教えます。救いに関して、私たちは全く希望のない存在なのです（イザヤ 64:6、ローマ 3:20）。

「神の恵みによって救われる」ことを知る

救い主イエス

人にはできないことを神はしてくださいました。自分を救うことができない私たちに対して、神は救い主をこの世に送ってくださったのです。それがイエス・キリストです。本来、私たちが受けなければならない罪のさばきを、十字架で、罪のない神のひとり子が代わって受けてくださいました。私たちが受けなければならない罪の報酬である死を、罪を持たないがゆえに死ぬ必要のなかった方が、代わりに受けてくださったのです。この身代わりの死のゆえに、イエスを信じるすべての人の罪は完全に赦されるのです。イエスの十字架での身代わりの死は、私たちのどんな罪をも赦すのに余りあるものなのです（使徒 4:12、ヨハネ 3:16、I テモテ 2:5、ヘブル 9:26、I ペテロ 1:20）。

信仰による救い

人は善行を積み、神に認められるようになることによって救いを得るものではありません。この救いは、神を心から愛する者に与えられます。このような者になるには、先ず、自分の力では決して救いを手に入れることのできない絶望的存在であることを認め、神に敵対し、神を愛さずに逆らい続けて来た罪を悔い改める必要があります。そして、永遠の地獄がふさわしい自分のために、十字架で罪のさばきを代わって受け、三日目にその死に打ち勝って肉体をもってよみがえられた主イエス・キリストを自分の神、救い主として信じ受け入れなければなりません。主イエスを信じるとは、ただ単に、主イエスに関する事実を認めることだけではなく、主イエスを自分の新しい主人として服従することの決心なのです（ヨハネ 3:16、ローマ 10:8-13、マタイ 16:24、I コリント 15:1-4、エペソ 2:8-9）。

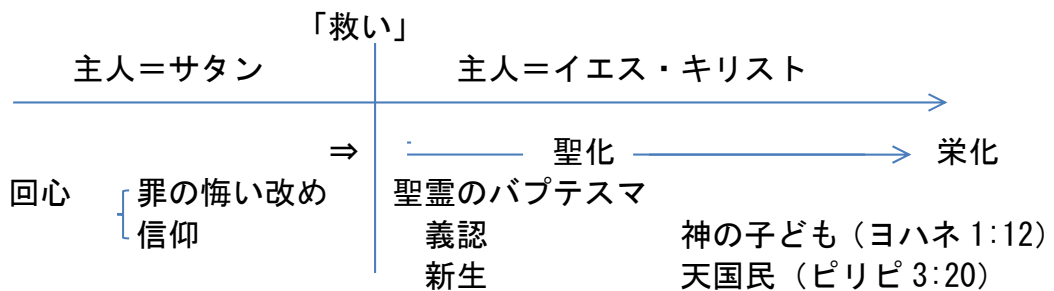
善行は人を救うことはありません。しかし、真の信仰をもって救われた人は、必ず、神の前に良い行ないを生み出す者に変えられていきます（エペソ 2:10）。なぜなら、本当の救いは、救われたすべての人を、聖い神に喜ばれる生涯を送りたいと心から願って生きる人に変える力を持っているからです（ヤコブ 2:14, 26）。

私たちは神が主権者であり、すべてのものを創造した、完全に聖い方であるということを知りました。このお方は、私たち罪人をさばいて当然な方だったのですが、その大なる愛のゆえに、私たちをあわれみ、イエス・キリストにある救いを私たちに与えてくださいました。キリストの為した救いのわざを私たちは受け入れ、イエスを救い主と信じ、生涯をかけてこの主に従順に従っていく決心をしたのです。この救いを受けたからといって、私たちが今後、罪を全く犯さない完全な者になったというわけではありません。しかし、イエスの身代わりの死ゆえに、それを信じる者の罪は完全に、また、永

遠に赦されているのです。そして、いつの日か主にお会いし、完全な者へと変えられるそのときまで、私たちは自らを清くしようと努力する者となったのです（Ⅰヨハネ 3:2-3）。

（付）

1. 「救い」の本質を理解する
 - （1）イエス・キリストの十字架を理解する（Ⅰペテロ 2:24-25）
 - （2）この「救い」は神の恵みである（エペソ 2:4-10）
2. 聖書をすべて真実として受け入れる
 - （1）変わることはない、神のみことばである
（詩 119:89, 160、マタイ 5:18 ; 24:35、Ⅰペテロ 1:23-25）
 - （2）「救い」の約束の真実性（Ⅰヨハネ 5:13、ヨハネ 6:37）
3. 各自の信仰の体験を通して



《義認》 義認とは、罪人を赦す神の法的な行為であり（ローマ 4:5 ;3:9-24）彼らを義と認められた者として受け入れ、以前は神から離れていた彼らと、神ご自身との関係を永遠に正しいものとする。この義と認める宣告は神が与える義の賜物であり（ローマ 5:15-17）、イエス・キリストのゆえに、神が私たちを受け入れてくださっているという立場を与えるものである（Ⅱコリント 5:21）。義と認められるということは、永遠に神との平和が保証されているということである（ローマ 5:1-5）。

《新生》 霊的に新しく生まれることであり、それは神が人の心を新しくされることであり（ヨハネ 3:3-5）、聖霊の働きによるものである。

「水と御霊によって生まれる。」

水 — 罪の汚れをきよめる

御霊 — 神の御霊を彼らのうちに授ける

エゼキエル 36:25-27 I ヨハネ 2:29 ; 3:9 ; 4:7 ; 5:1

《聖霊のバプテスマ》 すべてのキリスト者は、その救われた瞬間に、御霊によってバプテスマを受け、キリストのからだに加えられる。御霊は私たちのうちに住まわれる（I コリント 6:19）

マルコ 1:8、ヨハネ 1:33、使徒 1:5、I コリント 12:13、ガラテヤ 3:27、エペソ 4:5

救われている確信は持てるのか？

1. 神への（ ）がある エペソ 5:20
2. 神への（ ）がある I ペテロ 1:8,9
3. 神を（ ）という強い願いがある II コリント 5:9
4. （ ）から離れたいという強い願いがある I ヨハネ 3:6, 8-9
5. 神に（ ）の告白をする I ヨハネ 1:9
6. 聖書に（ ）という強い願いがある I ヨハネ 2:3
7. イエスに（ ）のを楽しみにしている テトス 2:11-13
8. 主にある兄弟への（ ）がある I ヨハネ 3:10-18 ; 4:19-21
9. （ ）を人々に伝えたいという強い願いがある I ヨハネ 4:14

Ⅱ. バプテスマとは

多くの方が、バプテスマを受けることによってキリスト教に入信する、または、クリスチャンになると思っていますが、このような考えは聖書的なバプテスマの理解に基づいたものではありません。聖書は私たちにバプテスマがどのような意味を持っているのかをはっきりと教えています。バプテスマがどのような意味を持っているのか、なぜ、このようなことをするのかを理解することは、これからバプテスマを受けようとする皆さんがしっかりと理解していなければならないことです。そこで、この章ではバプテスマを受けるとはどういうことなのかを考えていきます。

バプテスマの意味

新約聖書（特に使徒の働き）を通して私たちは、バプテスマとは神がクリスチャンのうちに為してくださった恵みのみわざを、人々の前で公にする行為であることを見て取ることができます。つまり、神によって救われたことを人々の前で証するのがバプテスマであり、救われるための手段・行為ではないのです。「バプテスマ」ということばは「水の中に浸ること」という意味があります。これは、神に逆らい罪人であった以前の自分が、キリストとともに死んで、葬られたことを象徴しています。同時に、「水の中から出て来ること」は、その自分がキリストとともに死よりよみがえったことを象徴しているのです。

また、バプテスマは神に対する従順の証でもあります。バプテスマを受けることは、主ご自身がイエス・キリストを信じ、救われた人々に対して与えた命令です（マタイ 28:19-20）。この命令に従って、初代教会はキリストを主と信じた者たちにバプテスマを授けていました（使徒 2:38, 41 ; 8:12, 13, 36, 38 ; 9:18 ; 10:47, 48 ; 16:15, 33 ; 18:8 ; 19:5）。それゆえに、キリストを主として迎え入れ、従っていくことを決心した私たちキリスト者にとって、バプテスマとは受けても受けなくても良いというものではなく、私たちの主に対する従順の証であり、受けなければならないものなのです。

バプテスマは、すでに自分の罪を認め、救い主であるイエス・キリストを信じた者が、その信仰と従順の証として行なうものです。これは、キリスト教に入信するために受けるものではありません。キリストを自分の主、救い主とした者だけが、神から与えられた救いと神への従順の証として受けるものなのです。

バプテスマを受ける備え

私たちがバプテスマを受ける前にしなければならないことは、バプテスマを受けようとしているひとり一人が、自分の信仰が本物かどうかを吟味することです。救われていない人がバプテスマを受けるのは偽善的行為です。なぜなら、救われていないにも関わらず、神が救ってくださったと偽りの証言をして人々を欺くことになるからです。ですから、当教会では、神と自分の関係を正しく理解し、自分の罪を知り、そこから立ち返り、救いを完成してくださったキリストを信じ、この方に従う信仰をもつ人にバプテスマを授けます。この信仰を持たない人はバプテスマを受けることはできません。

また、浜寺聖書教会でバプテスマを受けた人は、入会式を経て、当教会の教会員となります。それゆえに、自分の母教会となる浜寺聖書教会の教理、また、教会観などをこのバプテスマ準備クラスでしっかりと学ぶことが必要です。そして、同意、納得した上でバプテスマを受けましょう。

バプテスマの方法

キリスト教会の中には様々なバプテスマの方法があります。ある教会では「滴礼」という方法を取ります。これは頭に水を数回降り注ぐことによってバプテスマとするのです。しかし、「バプテスマ」ということばの本来の意味は、先に見たように「水に浸す」であり、聖書の記事を見ても「浸礼」というからだ全体が水に浸かる方法をとっているのを見て取ることができません。それゆえ、浜寺聖書教会でのバプテスマは浸礼によるバプテスマとなっています。

また、教会によっては幼児に対するバプテスマ（幼児洗礼）が行なわれるところがありますが、既述のように、バプテスマとは信仰を持った者がその信仰と従順の証として受けるものなので、信仰を持ったかどうかをはっきりと知ることのできない幼児に対するバプテスマを、当教会では行ないません。また、当教会では、何らかの理由ですでにバプテスマを受けていながら、実は、その後に真の信仰を持った場合、その真の信仰に基づいてバプテスマを受けることを教えています。

バプテスマを受けてから

バプテスマは信仰の終着点ではなく、一つの通過点です。私たちキリスト者はこの世の歩みを終えて天国へと導かれるまで、主に従順であることが要求されています（マタイ 25:21, 23、黙示 2:10）。バプテスマだけでなく、

他のあらゆる命令に関して、主の忠実なしもべとして歩み続けましょう。あなたの生涯を通して神の栄光を現わすことを、神はあなたに求めています。それが、あなたが主に召されるその時まで、為し続けなければならない生き方なのです。 I コリント 6:20 ; 10:31、ローマ 14:19、マタイ 28:19、マルコ 16:15、II テモテ 4:2、マタイ 22:37-39、マタイ 20:26-28、I テサロニケ 1:9、ガラテヤ 5:13

Ⅲ. 教会とは

私たちがバプテスマを受けることによって、会員となる教会とはどのようなところなのでしょう？ 「教会」について考えるには「共同の教会」と、「地域の教会」とをまずはっきりと区別することが大切です。

「見えない教会」（共同教会）

「見えない教会」とは、神よって罪から救い出された者たちの集まりを言います。ここには人種や民族の区別、また、国境などはありません。聖霊のバプテスマを受けて、キリストのからだに加えられた真のキリスト者だけの集まりです。この見えない共同の教会のことを「キリストのからだ」（I コリント 12:12-26、エペソ 5:23）、「神の人々、聖なる国民、聖徒」（ローマ 8:33、I コリント 1:2、コロサイ 3:12、I ペテロ 1:2 ; 2:9-10）、「神、聖霊の宮、神殿、聖なる宮」（I コリント 3:16, 17 ; 6:19、II コリント 6:16、エペソ 2:21）、「聖なる、王である祭司」（I ペテロ 2:5, 9）、「花嫁、小羊の花嫁」（II コリント 11:2、黙示 19:7-9）などと呼んでいます。

「キリストのからだ」と呼ばれる共同の教会の頭はキリストであり、すべての信者は例外なくそのからだの器官です。そのため器官であるすべての信者には、①頭なるキリストの命令に服従する責任、②器官としての働きを精いっぱいするという責任、そして、③お互いの中に一致を保つという責任があります（使徒 12:1、ローマ 12:4-5、I コリント 10:32 ; 12:12-23, 28 ; 15:9、ガラテヤ 1:13、エペソ 1:22, 23 ; 4:15, 16, 25、コロサイ 1:18 ; 2:1-13, 16-21 ; 3:4）。

1 聖霊のバプテスマとは、人が神を信じることによって救われたときただ一度起こるもので、これによって、聖霊がクリスチャンのうちに内住し、キリストのからだにつながるものとされる。これは聖霊の満たしとは違うものである（参照 I コリント 12:12-13）。

「見える教会」（地域教会）

「見える教会」とは、この地上に存在する、主キリストを唯一真の神、救い主と信じていると告白する人々の集まりです。見えない教会には、救われていない人は存在していませんが、見える教会（地上の教会）では、信じていると告白しつつも、実は救われていない人も存在します。ですから、見える教会にいるすべての人が、必ずしも真のクリスチャンであるとは限らないのです。また、地上の教会には聖書解釈の違いなどから生まれた多くの教派が存在します。しかし、「見えない教会」と「見える教会」のどちらも、「神の栄光を現わす」という共通した目的において一致しています。

地上に存在する地域教会には、私たちの神の偉大さ、そのすばらしさをこの世に知らしめるという大きな責任があります。そのために、私たちはこの神を正しく崇め、そのみことばに服従して生きることが不可欠です。そこには、①みことばを学び、そして語ること、②弟子を作ること（伝道し、訓練する）、③神を常に礼拝すること、④祈りをささげること、⑤助けいたわり合うこと、⑥神に喜ばれる家庭を築くこと、⑦各自に託されたもの（富など）を神のために用いること、⑧互いの徳を高め合う交わりを持つこと、などが含まれています。

浜寺聖書教会も「見える教会」の一つです。私たちは、神のみことばに正しく従っていくことを願い、神を礼拝し、互いの徳を高め、周りの人々にこの神のすばらしさを伝えていくことを切に求めています。これらのことは、日曜日に教会に集まって来るときだけ行なわれるのではなく、毎日の生活の中で行なわれていくことなのです。すでに、キリストのからだに加えられている皆さんは、バプテスマ・入会式を通して、地域の教会である浜寺聖書教会につながる者となります。神を拝し従っていく者として、神に喜ばれる生活をすることによって、神の栄光を教会の内外で現わしていきましょう。

IV. 浜寺聖書教会の教会組織

浜寺聖書教会の教派

浜寺聖書教会は、福音派の独立教会です。福音派とは、聖書が神のことばであり、イエス・キリストを信じる信仰によってのみ罪の赦しが受けられると信じているグループです（詳しくは教会教理を参照）。独立教会とは、その運営を独自で行なっている教会のことです。ですから、他の教会や、団体から一切干渉されません。

私たちが独立教会という立場を選択したのは、運営だけでなく、人の作った組織や考えや決定に左右されることなく、ただ純粋に神のことばである聖書の教えに従うためにです。

浜寺聖書教会の歴史

1945年に、マッカーサー元帥の占領軍とともに、従軍牧師として、当教会の生みの親であるジョージ・エストライク先生が初来日されました。アメリカでの1ヶ月間の休暇を終え再来日された1946年9月に、信太山の軍礼拝堂へ転属、浜寺公園での軍の礼拝を任されることになりました。浜寺公園に住む軍の家族のもとで働いていた若い人たちや、また、その礼拝に出席していた学生たちが、後に、浜寺聖書教会を作る核となりました。

1947年4月、アメリカでの休暇中に、先生の日本での話を聞いて懇意になったエステル・バーワ宣教師は、当時、美濃ミッションの宣教師として三重県四日市市に住んでおられたが、1947年秋より、エステル・バーワ、本山ジュリア、佐伯茂子各先生方のお働きが浜寺にて始められ、昭和町1丁63に福音交友会本部を設置、当教会の設立準備がなされました。

1949年、浜寺公園内米軍チャプレンとして働かれたジョージ・エストライク先生が、宣教師として再来日され、同年、10月9日に福音交友会浜寺聖書教会として、当教会が設立されました。

- ・1950年5月14日、現在地（浜寺昭和町4丁462）に教会の建物が与えられた。

- ・ 1957年2月17日、福音交友会より独立し、自主教会として歩みを始めた。
- ・ 1965年12月26日、堺市堀上緑町の伝道所、緑町聖書教会（現、津久野キリスト恵み教会）において礼拝を開始した。
- ・ 1984年4月1日、泉佐野市の伝道所、泉佐野聖書教会の礼拝を開始した。その後、2011年に浜寺聖書教会に統合された。
- ・ 1989年1月8日、奈良県葛城市の奈良伝道所で礼拝を開始した。

浜寺聖書教会の組織と運営

浜寺聖書教会では、聖書に記されている条件に適った「霊的リーダー」によって教会が運営されることが聖書の教えであると信じています。聖書は教会の霊的リーダーとして「長老たち」と「執事たち」の役割を記しています。

長老

聖書には「牧師」、「長老」、そして、「監督」と呼ばれる教会のリーダーたちのことが記されていますが、それらは全く異なった三種類の働き人ではなく、同じ一人の働き人を説明するものです。「長老」とは「白髪の、年をとった人」という意味で、ちょうど年をとった人物、つまり「長老」がその賢明さのゆえにこの世の人々から尊敬されるように、教会における霊的リーダーである「長老」も、その霊的な知恵において賢明な人であるところからこの呼び名が使われています。「監督」とは、霊的リーダーが神から託された群全体を「監督」するのがその務めであることを教えるために使われています。「牧師」とは、霊的リーダーが託された羊を監督するだけでなく、養い育てていくのがその務めであることを示すために使われています。この霊的リーダーである長老たちによって教会は導かれるのです。

長老たちの働きは、群れを監督することであり、また、養い育てることです。彼らは神が教会に与えた賜物であり（使徒 20:28）、その最も大切な働きは、みことばを教えることです。みことばを教えることによって、遣わされた教会の聖徒たちの信仰が成長し、それぞれが神の働き人として奉仕の働きを行なうようになるために、この務めが与えられているからです（エペソ 4:12）。

聖書は、教会の長老が常に複数の男性であることを教えています。霊的に成熟し、聖書の教えている規準に適った複数の長老たちが（1 テモテ 3:1-7、テトス 1:5-9）、神のみこころを聖書を通して判断し、教会を導くのです。

執事

新約聖書において、執事を表わすことばが三つあります。それらは①ディ

アコノス (diakonos)、奉仕者、使用人、召使い；②ディアコニア (diakonia)、奉仕；③ディアコネオ (diakoneō)、仕える、という意味を持つ三つのことばです。執事たちの主な働きは、長老の働きを助けることにあります。長老たちがみことばの教えと祈りに専念することができるように、執事たちは教会内の様々な具体的な働きのリーダーとして仕える役割を担っているのです。

執事たちも長老同様に、聖書の定めた規準を満たす人物でなければなりません（I テモテ 3:8-13）。彼らも成熟したクリスチャンとしての歩みをするを通して、教会員の模範となるのです。

聖徒

イエス・キリストを救い主と信じている者はすべて聖徒であり、神の家族（見えない教会）に属する兄弟姉妹です。そして、見える教会は、長老、執事、聖徒が霊的に一致し、愛のうちに建て上げられていくものです。教会の大牧者はイエス・キリストです。その大牧者から賜物として与えられた者たちが長老です。それゆえに、長老が若くても尊敬し、大切にし、軽々しく批判しないようにしなければなりません（I テモテ 5:17）。また、みことばに記されている霊的資質に適うものとして選ばれた執事たちも同様に尊敬し、そのリーダーシップに従うのです。聖徒はこのような教会の霊的リーダーたちが、常に、神のみこころに沿って教会を導いていくことができるように、彼らの霊性のために祈り続けることが大切です。

クリスチャンは霊的に成熟した人物となり、より主に用いられる者になることを願っていなければなりません。ひとり一人の聖徒は、聖書が教える成熟した人物の規準である執事、また、長老になるべく、神の前にへりくだりつつ成長していく必要があります。

私たちは神が何を求めているのかを吟味しながら生きるために、みことばからの知恵を常に求めていくことが必要です。自分の判断や、世の中の基準によって物事を決めていくのではなく、神のみこころを探りつつ、正しい生涯を全うするために、教会・聖徒らを導くために与えられているリーダーたちの知恵を求めましょう。

これらが浜寺聖書教会を構成する組織形態です。こうした役割を担うすべて

の者が、神を礼拝し、互いの徳を高め、イエス・キリストの福音を伝えるために、毎日の生活を神の前に従順に生きていく責任が与えられているのです。

V. 浜寺聖書教会の信仰告白

聖書

私たちは、聖書を構成する66の本（旧約39、新約27）はすべて、その原本において、そのすべての部分が平等に（十全靈感）、また、そのすべてのことばが靈感を受けた（逐語靈感）誤りの全くない神のことばであると信じる。また、聖書だけが信仰と生活における絶対の規範として、神から人に与えられた唯一のメッセージであるため、これをそのとおり信じ受け入れ、また、これに服従する（すなわち、愛し、学び、伝え、実践する）という責任が人にあることを信じる。

神

私たちは、万物すべてを創造され、それを完全な知恵と力で治めておられる唯一の神を信じる。神は永遠に、父、子、聖霊の三位において存在しておられるが、しかし、それぞれは本質において同一であり、力と栄光を等しくする、すべての被造物によって崇拝を受けるに値する唯一のお方であると信じる。

イエス・キリスト

私たちは、イエスは真の神であり、真の人であることを信じる。イエスが聖霊により身ごもった処女マリヤから人として生まれられたのは、罪に汚れた人類を救うためであった。そして、自ら進んで十字架にかかり、人類が受けるべき罪のさばきを代わって受けてくださった。イエスは、死後三日目に約束通りよみがえり、現在、天にあって、私たちのためにとりなしをし、将来、私たちを迎えるために再臨されることを信じる。

聖霊

私たちは、聖霊が神としてのあらゆる属性を兼ね備えたお方であると信じる。聖霊は、人に罪を示し、認めさせるだけではなく、救いへと導かれる。そして、救われた人のうちに内住し、その人を助け、励まし、教え、導き、そして、キリストに似た者へと造り変えていかれることを信じる。

人間

私たちは、神によって造られた最初の人間アダムが、自らの意志によって神の命令に逆らい、罪を犯し、その結果、霊的にも肉体的にも死ぬ者となったことを信じる。すべての人は、このアダムにあって罪を犯したため、生まれながらに神に逆らう罪人であり、そのため神のさばきが約束されていることを信じる。

救い

私たちは、救いは、救いに関するいかなる希望も、可能性もない私たち罪人に対して、神が一方的に備えてくださった神の恵みの賜物であると信じる。神は、霊的に死んでいた私たち罪人の救いのために救い主を与えてくださり、その贖いのみわざを信じる者を例外なく救ってくださる。しかも、その信じる信仰さえも、神が与えてくださる賜物であると信じる。それゆえ、救いとは神のわざであり、賜物なのである。神は人をその罪のさばきから、また、その力から救い出してくださるだけでなく、神に喜ばれる新しい歩みへと導かれる。この救いは、永遠に続く、決して失うことのないものであり、人が救われたその瞬間から、その人をキリストに似た者へと変える聖霊の働きが始まると信じる。

教会

私たちは、教会は神の恵みによりこの世から召し出されたクリスチャンの集まりであると信じる。クリスチャンは、そのかしらであるイエス・キリストに服従するという責任を負っている。それは、すなわち、聖書のみことばに従うことである。神が教会に与えた使命は、弟子作り、すなわち、福音宣教と、信者の教化であると信じる（マタイ 28:19-20）。そのために、教会はみことばを学び、その教えに服従し、神を礼拝し、礼典（バプテスマ、聖餐式）を守り、伝道し、教化に励み、それぞれの霊的賜物を用いて互いに仕え励まし合い、そして、再臨を待ち望むのである。

終末

私たちは、キリストがその花嫁である教会を迎えに来られる日を待ち望んでいる。そのとき、すでに死んでいた信者が栄光のからだをもってよみがえり、次に生き残っている信者が栄光のからだに変えられて、空中で主キリス

トにお会いすると信じる。この空中再臨後7年間の患難時代を経て、イエスはこの地上に再臨され、世をさばかれる。その後、千年王国時代を経て、サタンと悪霊、また、神を信じなかった罪人を永遠にさばかれる。彼らには永遠の刑罰が与えられていることを信じる。

VI. 浜寺聖書教会会員の責任

バプテスマを受け、正式に浜寺聖書教会の一員となる皆さんには、教会員としての責任が生じます。様々な責任がありますが、特に重要な事柄を、この章では見ていきましょう。

聖餐式

聖餐は、キリストの死、すなわち、キリストのからだ裂かれ、血が流されたことを象徴的に示しています（Iコリント 11:23-32）。主イエス・キリストを救い主と信じ、その信仰を公にし、キリストに服従することをバプテスマを受けることによって表明した人が、聖餐式にあずかります。これは、救いにあずかっている者が、キリストの犠牲を通していのちをいただき、罪の赦しに入れられていることを覚え、自分の生活を吟味し、神への感謝と献身の思いを新たにするときなのです。

主イエス・キリストへの感謝と服従を表わす聖餐式は、兄弟がキリストのいのちにあずかって一つであることをも表わします。聖餐式を軽んじる者は、主イエス・キリストとその約束とを軽んじる人です。なぜなら、キリストご自身がこれを覚えて行なうように命じているからです。教会で定められた聖餐式には、必ずあずかるようにしましょう。

礼拝

神を礼拝することはクリスチャンの特権であり、責務です。神の栄光を誉め称えるために私たちは救われているのです（エペソ 1:6, 12, 14）。この礼拝は、イエスの復活を記念してともに集まって行なう主日礼拝と、ひとり一人のクリスチャンが毎日の生活を通して行なう日々の礼拝に、大きく区分することができます。私たちは教会の集会として礼拝を捉えがちですが、本当

の礼拝とは儀式的なものではなく、信徒が毎日の生活の中で、神を崇める心から行なうものです。それゆえに、たとえ、日曜日に教会に来て礼拝に参加していたとしても、日常の生活の中で神を称えることを怠っているなら、その人がささげる礼拝を神が受け入れることはありません。普段から神を称え、神の栄光を現わす生涯を願い求め、その実践をしている者たちの礼拝を神は受け入れられるのです。個人の礼拝生活が神に喜ばれるものになるとき、ともに集まって行なう礼拝は、神に受け入れられる、すばらしい礼拝になるのです。

成長

クリスチャンの終着点は、救いでも、バプテスマを受けることでも、教会員になることでもありません。主に似た者に変えられて、完全な状態で主を永遠に称えることなのです（ピリピ 3:10-16）。ですから、このキリストに似た者となるという希望をもつ者は、キリストと同じように、聖い者になることを切に求める者です（Iヨハネ 3:3）。

キリストに似た者になるには、キリストがどのような方だったのかを正しく知らなければなりません。また、私たちが抱える様々な問題をどのように正しく解決し、神に喜ばれる生涯を歩むことができるようになるかを知らなければなりません。そのために、私たちはみことばをしっかりと学ぶ必要があります。聖書を通して、神のみこころを知り、神の命令に従順に従っていくことが必要なのです。

同時に、私たちには同じ主を愛するクリスチャンとの交わりが必要です。私たちは一人でこの成長を成し遂げることはできません。ひとり一人のクリスチャンに与えられている聖霊の賜物を用いて、互いに助け合い、成長を促し合うことが必要なのです。それゆえに、クリスチャン同士の交わりを拒むようなことがあってはいけません。むしろ、積極的に交わりに参加し、兄弟姉妹を愛し、互いに仕え合い、助け合い、教え合うことが求められているのです。

弟子作り

マタイ 28:19 で、主は「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。」と命じています。この大宣教命令と呼ばれる命令は、すべてのクリスチャンが遂行しなければならない主の命令です。弟子とするに当たって、主は私たちが出て行って、この世の人々に伝道することと、救われた人々を教えることを求めています。この弟子を作るという命令を私

たちはクリスチャンとして実践していかなければならないのです。

伝道は教会がすることであると考えの人がいますが、伝道はひとり一人のクリスチャンに命じられていることです。この伝道は、伝道集会や教会の行事に人々を誘うことではなく、自分で人々に福音を伝えることです。家族や友人など、自分の周りにはいる人々に救いの喜びと神のすばらしさを伝えたいと願うのは、クリスチャンが持つ大きな願いであるはずで、それを実践するために、私たちは明確に福音を説明することができるようにならなければなりません。また、勇気をもって人々に福音を伝えていかなければならないのです。

同様に、教えることは教師や教会のリーダーたちがすることであると考えの人がいますが、これもクリスチャンひとり一人に要求されていることであることをしっかりと理解する必要があります。自分たちの得た知識や、様々な失敗の経験を通して、自分よりも未熟なクリスチャンたちを教え、助けることが求められているのです。こうして救われていない人を救いに導き、信仰を持った人々を教えて、弟子を作るという命令を全うするのです。また、私たち自身が、この働きを受ける者であることも忘れてはいけません。自分が弟子を作るだけでなく、より成熟したクリスチャンの弟子とされて、ますます、神に似た者へと成長を遂げていく必要もあるのです。

従順

真のクリスチャンはイエス・キリストを救い主として信じるだけでなく、主として従う者です。神である主として従う者です。そして、神のみこころが聖書を通して明らかにされていることを確信しているがゆえに、聖書のことばに従順であろうとするのです。聖書を学び、みことばの知識と理解が増し加わっていくと、クリスチャンは自分の罪深さにさらに気付かされていきます。そして、日々悔い改め、罪から離れ、主に似た者として歩んでいこうとするとき、成長がもたらされるのです。

この従順は人生のあらゆる分野に影響を与えます。社会においてクリスチャンは自分たちの上にある権威に従うことが命じられています。子どもであれば、親や教師に対して従順であることが求められますし、大人であれば、自分の上司、政府などの権威に対して従順であることが要求されます（ロー

マ 13:1-5)。家庭にあって妻は夫に従順でなければなりませんし、夫は妻を導き愛さなければなりません（エペソ 5:22-33）。教会においては、信徒は教会の長老に従うように命じられています（ヘブル 13:17）。神は混沌の神ではなく秩序の神です。それゆえに、神は社会に、家庭に、そして、教会に秩序をもたらすためにリーダーを立てているのです。絶対的に権威者であ

る神に従う者は、その神が立てたリーダーに従おうとします。また、自分が成長することによって、神に喜ばれるリーダーになろうと努力するのです。

献金

「ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。」（Ⅱコリント 9:7）。

献金の原則

献金は、聖書の原則に従ってささげることが大切です。

- a) 献金は、決して強いられてするものではなく、各自が自由に、自発的に行なうものです。この原則は旧約時代も新約時代も同じです（Ⅱコリント 9:7、申命記 16:10, 17）。
- b) 献金は、各自の収入に応じて、また、持っている程度に応じてささげます（Ⅰコリント 16:2、Ⅱコリント 8:2-12）。

他にも、教会員としての責任がありますが、それらはより具体的に、入会後クラスで学んでいきます。何よりも、皆さんが負っている最も大きな責任は、「あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」（Ⅰコリント 10:31）というものです。皆さんが主の栄光を豊かに現わす者として成長していくことを心から願っています。

